

2024年6月30日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ51「赦しに生きる祈り」

詩編51：3～6、Iヨハネ2：1～6

問126第五の願いは何ですか。

答 「われらに罪をおかす者をわれらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」です。すなわち、わたしたちのあらゆる過失、さらに今なおわたしたちに付いてまわる悪を、キリストの血のゆえに、みじめな罪人であるわたしたちに負わせないでください、わたしたちもまた、あなたの恵みの証をわたしたちの内に見出し、わたしたちの隣人を心から赦そうとかたく決心していますから、ということです。

日々の糧が、わたしたちの肉体、命に直接関係するものとするならば、赦しはわたしたちの内面、心の奥深くに関係していくものと理解することができます。人間は、ただ体だけで生きているわけではありません。わたしという存在の中心、魂が、体と同様に養われ、満たされていかなければ、人間は本当の意味で健やかとは言えないのです。では魂が求めているものとは何でしょう。それが赦しです。多くの人々はそのことに気づいておりません。自分は、誰かから赦してもらわなければならないようなことはしていないと考えるでしょう。しかし、聖書に従えば、人間は初めから神さまに対して罪を犯しました。信仰問答では、罪によって人間の本性は毒され、どのような善に対しても全く無能で、あらゆる悪に傾いていると言います。

今日の間答でも「わたしたちのあらゆる過失、さらに今なおわたしたちについてまわる悪」とありました。「過失」というのは、自分でも意図していないところで、思いがけずしてしまう過ちです。そういう失敗を数え切れないほどしてわたしたちは重ねているでしょう。それだけではありません。「今なおわたしたちについてまわる悪」これは洗礼を受けてイエスさまに救われているはずなのに、それでもなお悪い思いが湧き出てしまう。それは、この地上の歩みにおいては、まだ救いの完成に向かう途上にあるからです。悪いと思いつつも、故意に神さまに背いていく。そこには開き直りがあるかもしれません。「どうせ罪人だ」「人間は弱いんだ」と。また甘えもあるでしょう。「神さまなら赦してくれるだろう」そういう開き直り、甘えがあって、わたしたちは一向にこの罪から自由になれません。

それどころか自分は正しい、間違っていないと自分を正当化していくのです。わたしたちはなかなか自分の失敗や過ちを認めたがらない傾向にあります。それよりもあの人が悪い、この社会が悪いと罪の責任を誰かに押し付けるようなことをする。あのアダムとエバの物語でも責任転嫁がありました。誰かを悪く言うことで、自分を正当化し、その罪を見えないようにする。これもまた人間の罪の性質と言えるでしょう。そしてこのような自分の非を認めない、自分を正当化し、相手を非難する世の中が、結果として赦しのない今の世界を作り出しています。人は、自分のことは棚に上げて、人を裁くことに躍起になっています。誰かを攻撃することで自分の過ちを打ち消していく。それが世の中の分断を加速させています。まさに今の世界は、二極化が進み、歩み寄ることができない、和解には程遠い現実があります。戦争もなかなか終わりが見えません。どうしたらいいのか。誰も答えを見いだすことができない。ここに人間の限界があります。

しかし、これを乗り越えるのが信仰です。信仰問答に「キリストの血のゆえに」とあります。このような人間の罪のためにイエスさまは全世界の罪を償ういけにえとして死んでくださった。

誰かに罪を押し付け、自分を正当化していくわたしたちの、その罪を全部引き受けて、イエスさまは十字架で血を流されたのです。ヨハネの黙示録に「その衣を小羊の血で洗って白くした」（7：14）とあります。一度聞いたら忘れられない御言葉です。罪を認めず、自分を正当化し、どこまでも身の潔白を主張するわたしたちに対して、「よろしい、お前たちが認めようとしないうその罪をわたしが引き受けてあげよう」と血を流して、その血によってわたしたちの頑固な罪のシミを洗って白くしてくださった。わたしたちの罪の汚点、人を裁く思い、非難、攻撃を全部その身に負って赦してくださった。このイエスさまの赦しが、この赦しのない世界の行き詰まりを乗り越えていきます。

さらに注目したいのは、「わたしたちもまた、あなたの恵みの証をわたしたちの内に見出し」とあります。「あなたの恵みの証」とはイエスさまが十字架で血を流してわたしたちの罪を赦してくださったことに他なりません。その赦しの恵みをわたしたちの内に見出すこと。イエスさまの赦しの恵みをわたしのこととするということです。イエスさまの十字架の贖いは、他でもないわたしのためであった。これは重要です。自分でも気づかない過失も、日々、神さまを忘れ、神さまに背き続ける悪い思いも、イエスさまが引き受けてくださり、十字架で死んでくださった。その赦しを自分に与えられた恵みとさせてくださいと祈っているのです。なぜなら、その赦しの体験こそ、わたしたちが誰かを赦す本当の力になるからです。神さまの赦しを持って、わたしたちも赦しに生きるのです。

先日、新聞のある記事が目にとまりました。「成田闘争にみる雪解けの底流」（朝日新聞2024.6.7付）と題する文章です。その記事では、かつて敵対していた反対派の人と空港公団の人との対話がなされたことが書かれていました。そこには、あの事業を推し進めた空港公団、政府の人たちの心情が吐露されていました。「成田問題は本当にこれでよかったのか」という疑問があったと正直に書かれています。「もっと他にやりようがあったのではないか。その後ろめたさを多くの人々が抱いていた」と。そしてその悔悟、呵責が対話を可能にした。そして「和解への道筋は、己の至らなさを自覚した時に初めて得られるものかもしれない」と書かれていました。

わたしたちは、毎週の礼拝において、罪を告白し、その己の至らなさをいつも覚えています。それだけではありません。その至らなさを十字架の血で洗って白くしてくださる神さまの救いを知っているのです。赦しの恵みを体験しているのです。ここにしか救いはありません。赦し、和解もこの神さまの赦しの恵みから始まります。

天の父よ。しつこくまわりつく罪のシミをイエスさまの血で洗って白くしてくださる赦しの恵みを感謝します。この神さまの恵みの証をしっかりと心に留めることができますように。そしてそれゆえにわたしたちも赦された者として赦しに生きる者とさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。